

平成 22 年 1 月 20 日

産山村総務課 様

「産山ウインドファーム（仮称）環境影響評価方法書」についての意見書

日本野鳥の会熊本県支部

支部長 高野茂樹

阿蘇地方には、長年にわたり火入れや草刈りなどの人為的な行為で形成された山地草原が広がり、ヒトと自然が調和してきた熊本を代表する景観が形成されています。草原を中心に、春夏の繁殖期には阿蘇独特の鳥相として、カッコウ、コヨシキリ、コジュリン、オオジシギ、ホオアカ、クロツグミなどが生息しています。コジュリンは国内でも局地的な繁殖しか見られない種、ホオアカとコヨシキリは草原との結びつきが強い種で、いずれも日本列島における繁殖の南限あるいは南限に近いということから重要視される種です。さらに、オオジシギは、九州で初めて阿蘇での繁殖が確認された種です。この他にも外輪山の内側である阿蘇谷には昔からマナヅルやナベヅルの飛来も見られています。猛禽類では、産山村においてもオオタカやサシバ、ノスリが繁殖し、冬期にはノスリ、ケアシノスリ、ハイロチュウヒ、チョウゲンボウなどが生息しています。

これらの多くの種は熊本県レッドデータブック（2009）に掲載され、クロツグミは絶滅危惧ⅠB類、オオジシギ、サシバ、コヨシキリは絶滅危惧Ⅱ類、オオタカは準絶滅危惧、ノスリとホオアカは絶滅の恐れのある地域個体群に指定され、カッコウは要注目種に位置づけられています。建設予定地と隣接する「阿蘇北外輪・端辺原野（阿蘇市）」は、コジュリン、オオジシギ、コヨシキリなど県内で極めて稀な種が生息しているハビタットとして記載されています。

この度の、「熊本県産山村における風力発電」、仮称「産山ウインドファーム」計画は、昔から生息している草原性野鳥の重要なハビタットである阿蘇草原の一角を占める産山村に計画されており、バードストライクや低周波による野鳥生息・繁殖への影響が危惧されます。

「産山ウインドファーム（仮称）環境影響評価方法書」には、事業対象地域の自然概況及び環境影響評価の項目・調査方法が記述されていますが、上記のような視点から鳥と人との共生を目指すために、より緻密な環境影響調査を実施いただきたく、以下のことを強く要望いたします。

1. p98の(2)調査の手法(ア)鳥類①ルートセンサスに関して、3ルートが予定されていますが、発電機4～9、20及び21号機を貫く道路沿いに新たなセンサスルー

トを作り、また、発電機 18 及び 19 号機周辺にもセンサスルートを設け建設後の影響を評価しておく必要があります。発電機設置予定周辺の草原性野鳥及び猛禽類の生息状況を把握するためには、欠かせないルートです。

2. p98 の (2) 調査の手法 (ア) 鳥類②定点センサスに関して、定点ポイントが 3 カ所予定されていますが、現地の野鳥生息状況を把握するには定点ポイントが不足であり、発電機 18 及び 19 号の中間地点にも定点ポイントを増やす必要があると思われます。
3. p98 の (2) 調査の手法 (ア) 鳥類③任意観察調査に関して、隣接地にはコジュリンの繁殖地があることから、コジュリンやコヨシキリ、オオジシギについては事業対象地域周辺部での繁殖状況も把握して影響を評価してください。
4. P99 の (3) 調査地域等(b)の(ア)に関して、事業実施区域と周辺区域の比較のために St1~4 から適宜 2~4 地点を選択して…とありますが、周辺地域での調査地点が設定されていません。実施区域と周辺区域の比較のためには、設定した定点 St1~4 で十分把握できるのか視野図等を用いて示してください。十分把握できない場合は、新たに定点を設置してください。
5. P99 の (4) 調査期間等(a)に関して、現地調査は、春季及び夏季とありますが、発電機が四季を通じて稼働するのであれば、四季を通じた生息状況調査を実施し、それを元に評価してください。
6. P99 の (4) 調査期間等(b)の (ア) に関して、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チョウゲンボウなどの利用状況も評価の対象にして調査する必要があるため、1~6 月、9 月、10 月に加えて、11 月、12 月の状況を把握する必要があります。事業対象地区は、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チョウゲンボウなどの冬の狩り場としても利用されているためです。

また、希少猛禽類の調査は 1 月~6 月とありますが、それは毎月調査されるのか、何回調査されるのかの記載がないため、明記してください。